

不完全なふたり

2007(平成19)年7月11日鑑賞〈東宝東和試写室〉

★★★



監督・構成＝諏訪敦彦／撮影＝キャロリーヌ・シャンプティエ／出演＝ヴァレリア・ブルーニ＝テデスキ／ブリュノ・トデスキーニ／ナタリー・ブトゥフ／ルイ＝ドゥ・デ・ランクサン／アレックス・デスカス（ビターズ・エンド配給／2005年フランス、日本映画／108分）

……諏訪敦彦監督が、全編フランス語で2人のフランス人俳優を起用した不思議な雰囲気映画は、たしかに「作家性」がいっぱい。また、離婚を決意した15年目の夫婦が織りなす、シナリオなしの即興撮影の物語は、独創性も十分。しかし、思わせぶりのタイトルと映画の結末を、あなたはどうか解釈……？ なお、この映画の撮影手法を契機に、ショット、シーン、シークエンスそしてカット、テイクという言葉の意味を勉強してみたいかが……？

■ 諏訪敦彦監督とは？

私は全然知らなかったが、1960年生まれの諏訪敦彦監督のヨーロッパにおける評価は圧倒的なものがあるらしい。そして、それは定型のシナリオなしで撮影していくという彼の作風の完成度の高さにあるらしい。

プレスシートによると、①『2／デュオ』（97年）がロッテルダム国際映画祭でNETPAC賞を受賞、②2作目の『M／OTHER』（99年）が、99年のカンヌ国際映画祭監督週間に出品されて、国際批評家連盟賞を受賞、そして③3作目の『H Story』（01年）が、2001年カンヌ国際映画祭のある視点部門に出品された、とのこと。また、私が2007年1月23日に観た『パリ、ジュテーム』（06年）では、唯一の日本人監督として、第8話『ヴィクトワール広場』を監督している。

さらに本作の世界プレミアとなった第58回ロカルノ国際映画祭では、準グランプリにあたる審査員特別賞と国際芸術映画評論連盟賞をダブル受賞したとのことだ。

日本人監督が全編フランス語でフランス人俳優を

この映画はフランス・日本映画とされているが、それは監督やプロデューサーが日本人だからであって、映画そのものは全編フランス語。また『不完全なふたり』というタイトルどおり、マリー（ヴァレリア・ブルーニ＝テデスキ）とニコラ（ブリュノ・トデスキーニ）という結婚して15年になる夫婦の離婚の危機（？）を描くもの。

諏訪監督はフランス語がほとんどわからないけれども、それがハンディキャップになるとは全然思わなかったとのことだし、映画全編にわたって登場するヴァレリアもブリュノも、そのことは全く同じだったらしいというから不思議なもの。つまり映画づくりには、必ずしも言葉は必要ではなく、感情を理解する知性があればいいということらしい……。とはいっても、やはり不便だったと私は思うのだが……？

シナリオなしの即興とは……？

諏訪監督の映画製作の手法はシナリオなしの即興での撮影らしいが、この映画を観ているとそんな撮影風景が実によくわかる。この映画に限って、あえて撮影のキャロリーヌ・シャンプティエを紹介したのは、監督の意思や俳優の意思とともに、この映画では撮影者の意思が大きく影響すると思ったから。

私が映画検定4級と3級を受けるについて勉強したのが、ショット、シーン、シークエンスという言葉の意味。日本ではカットと呼ばれることが多いが、ショットとは「映像の単位で、時間的に連続して撮影されたフィルムの頭のコマから末尾のコマまでを1ショットと数える」。また、「1つの場所あるいは特定の人物の行動を連続して描写したショットの集合体をシーンといい、場所、時間、表現スタイルが変わることで1つのシーンが終わり、別のシーンになる」。そして、「シーンが集まって1つの場面やエピソードになったものをシークエンスという」。

他方、カットとは、「日本ではショットの意味で使われることが多いが、監督が『カット』と言うと、そのショットの撮影が終了したことを意味する。また、最終編集が終わった決定バージョンをさす場合もあり、ディレクターズ・カットとは監督が編集したバージョンをいう」。そして、テイクとは、「監督が『カット』を宣言するまでにカメラが撮影した部分と呼ぶが、OK、終了と判断されないなどの場合は何度もテイクが重ねられる」（以上『映画検定 公式テキストブック』182～183頁参照）。



そういう知識を前提としてこの映画撮影の特徴を解説すれば、それは、カメラを特定しないまでもほとんど動かさないまま、1つの舞台におけるマリーとニコラのやりとりを長い時間ワンシーンで撮っていること。しかもそれは時系列に沿って構成されていくから、これなら逆に私のような素人にもできそうと思ったのだが、そこに作家性や特殊な意義を求めるのがフランス流……？

舞台はパリだが……

この映画の舞台はパリ。リスボンに住むマリーとニコラの2人がパリにやってきたのは、友人の結婚式に出席するため。映画冒頭の車の中のシーンや、ホテルの部屋の中でわざわざエキストラベッドを入れるシーンなどをみていると、「これぞパリ！」という華やかさは全くなし。別に夫婦げんかをしているわけではないが、白々しい雰囲気がいっぱいなのは、お互いに離婚を考えているせい……？

マリーは1人美術館に

到着した翌日、友人ヴァンサン（レイ＝ドール・デ・ランクサン）との食事の席で、ニコラが「自分たちは別れることにした」と話したことをマリーは怒るが、これは私には、「今更何を……」と思えてしまうもの……。まあ、こんな些細なことがケンカのネタになるのだから、この2人は既におしまいと思ったのは、映画の観客としてで

はなく、弁護士として……？

したがって、翌日、結婚式に出る前に、マリーが1人でロダン美術館に行ったのもうなずけるもの。つまり、2人一緒に行きたいところはどこにもないし、そうかといって部屋の中で一緒ではかなわないということ……？

また2度目に行った時、マリーは旧知のパトリック（アレックス・デスカス）と偶然出会うことに。男の子を連れのパトリックと話が盛り上がっていた中、彼の奥さんが死亡したことを聞くと、突然マリーは……？

ニコラも1人夜の街を

マリーとニコラは15年目のベテラン夫婦だから、離婚を考えているとしても友人の結婚식을ソツなくこなすくらいのは容易にできるのは当然。しかし、結婚式が終わり、ホテルに帰ってくるとニコラの目の前に見えるのはマリーの不満そうな顔ばかり。そこでニコラは「何かあるなら話してくれ」と言ったのだが、これはよくある中年夫婦のケンカのパターン。そしてそんな場合、どちらかが部屋を出て行くのもパターンどおり。この夫婦の場合それはニコラだったが、さてニコラは1人出かけていった夜の街で何を……？

再びお決まりのパターンが……

パリには友人の結婚式のために出てきただけだから、ニコラが夜のパリの街へ出てどこへ行けばいいのかわからないのは当然。しかし、そこは男は何かするもの、そして何とかなるもの……？ 夜の街でニコラが会ったのは「グラスの底を覗いている」男。その後さまざまな不思議な出会いが……。そして翌朝、ホテルへのご帰還……。

そこで起こるのは、お決まりの「あなた、どこに行っていたの？」という争いゴト。夫婦げんかをした後、夜の街に夫が1人で出て行ったのだから、マリーも放っておけばいいのに、そんな時に限って(?)寝ないで起きているから、始末が悪い……？ そこで、この映画におけるマリーの名ゼリフ「私たちは何をしたの?」「何をしなかったの?」が登場……。



「別室に移動」、はきつい

諏訪監督はこんな「シーン」を次々と重ねていく。そして、それは時系列に沿っているから、非常にわかりやすいもの。でも、正直なところ、観ていると少ししんどいというか退屈してくるのは否定できないところ……？

そんなシーンがいつまで続くのだろうかと考えながら観ていると、今度はニコラがホテルの部屋に帰ってきたところ、部屋の中にマリーの荷物が無い。さあ大変……。マリーはニコラに愛想をつかして1人リスボンへ帰ってしまったのか、と思っているとそうではなく、1人別の部屋に移ったらしい。でも、こりゃきつい。なぜなら、それは対話拒否だけではなく、完全な面会拒否。私にはそう思えたが……。

意外な展開 その1

ところが、マリーが部屋を移ったのはどうもそういう意味ではなかったらしい。なぜなら、マリーが1人眠っている部屋にニコラが入ってきても、マリーはそれを拒絶しなかったから。そのうえやさしく、「食事に出よう」と誘うニコラに対して、マリーはそれを了解し、服を着替えはじめたから意外。一体、彼女はどんな気持で部屋を移り、今どんな気持で一緒に食事に出ようとしているのだろうか……？

意外な展開 その2

さらに意外だったのは、マリーが服を着替えているうちにニコラがついムラムラとしてきたのか、やさしくマリーを抱きよせてキスをしようとしたところ、マリーもそれに応じ、そのまま2人がベッドの上に倒れこんだこと。そして、そのままマリーを求めるニコラとそれに応えていくマリー。こんな展開は私には全く理解できなかったもの。ところが、そのまま2人の行為は進むことなく、中断。それは一体なぜ……？

ラストは駅のホームがよく似合う……？

さて、この映画にはどんな結末が待っているのだろうか？ それは、私を含め多くの観客には全く予測がつかないはず……？ もはや冷えきった2人の関係は、一時の肉体的な欲望だけではどうにもならないとわかって、ベッドから離れるニコラに対して、マリーは「明日、ボルドーへ行くわ」と遂に決別の宣言を……。それを受けて、ホテルの部屋のシーンの次は、駅のホームのシーンへ。

私も今から19年前の1988年にヨーロッパ旅行をした時、始発駅からの列車に乗ったことがある。始発駅のホームの構造は基本的に阪急や阪神の梅田駅と同じだが、やはりヨーロッパの始発駅は何となく雰囲気が違うもの。そして、それはこの映画でも同じ。

駅のホームで、列車に乗ろうとしているマリーをニコラが見送るシーンでは、「誰か迎えに来るの？」「いいえ、誰も」というセリフを交わした後は2人はじっと見つめ合っているだけ。その間、かけ足で列車に乗り込む客が2、3人登場してくるから、発車時間が迫っていることがよくわかる。また日本のように、マイクによる発車案内や発車ベルが鳴らないまま静かに列車は動き出すが、そんな中、見つめ合う2人は……？

こんなラストシーンで2人がどうなったのか？ それはあなたの目で直接確認してもらいたいが、こんな暗示的なラストシーンはいかにもフランス流……？

2007(平成19)年7月18日記